

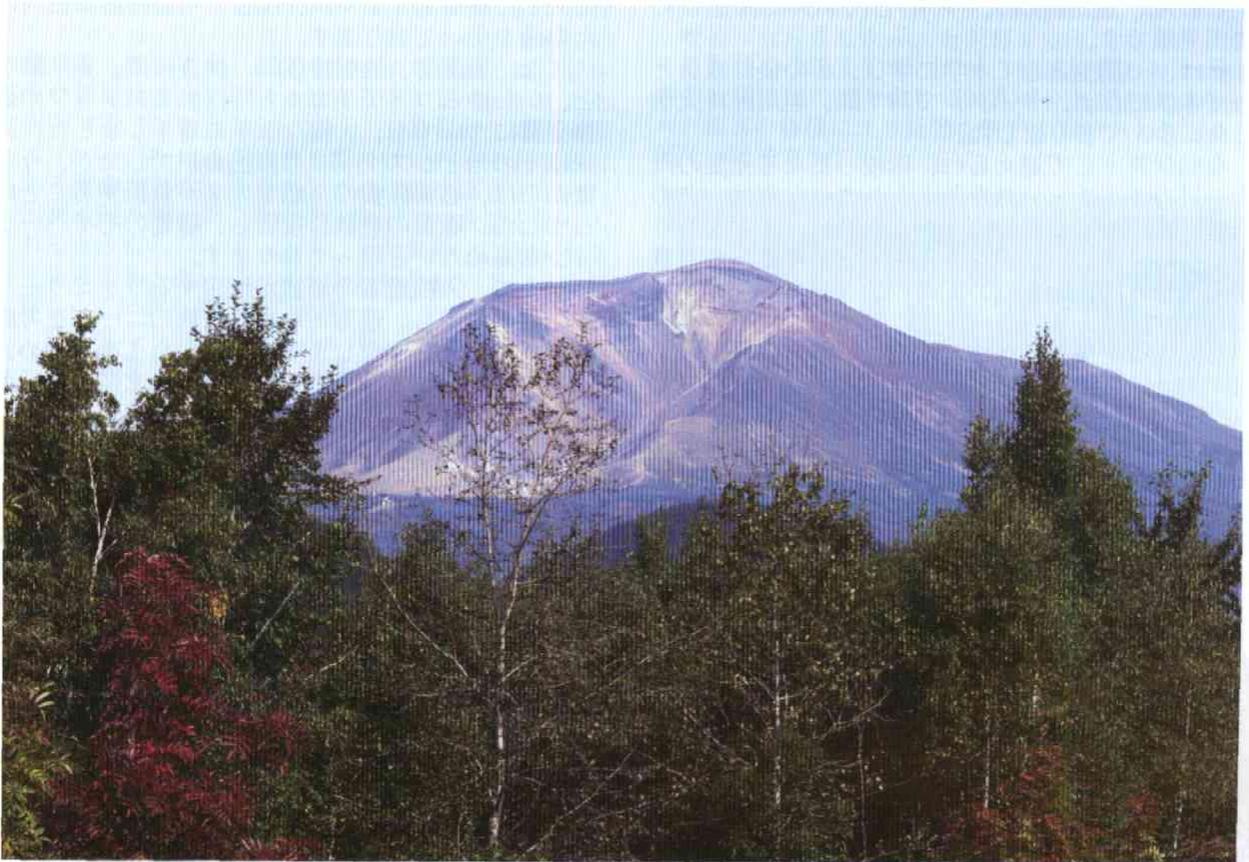
かぐらおか

(題字は初代学長 山田守英氏)

第 130 号

平成19年10月1日

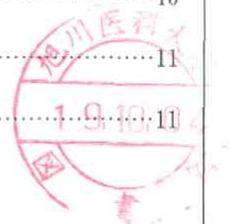
編集 旭川医科大学
発行 教務部学生支援課



「旭岳」(東川町)

(写真撮影：学生支援課)

学長に就任して……………吉田 晃敏………… 2	外国人留学生夏季オリエンテーション…………… 9
大学改革担当副学長として	クラブ紹介
何をどう改革すべきか?……………笹島 唯博………… 3	陸上競技部……………10
副学長(病院長)就任のご挨拶……………松野 丈夫………… 4	ゴルフ部……………10
研究担当副学長に就任して……………飯塚 一………… 5	合唱部……………11
副学長(入試・評価担当)に就任して	ギター部……………11
……………山内 一也………… 6	管理室より
新図書館長としての抱負……………藤尾 均………… 7	課外活動用具貸出の御案内……………12
平成19年度解剖体慰霊式…………… 8	窓 外……………山本 明美…………12
体育大会開催されました…………… 8	





学長に就任して

第7代旭川医科大学長 吉田 晃 敏

この度、旭川医科大学の第七代学長に就任した吉田晃敏です。

私は、一期生として本学に学び、その後は教員として本学に仕え、トータルで34年間、旭川医科大学と共に歩んで参りました。

今回学長として迎えられ、母校の更なる発展のために尽力するチャンスを与えられました事は、この上ない喜びでございますが、同時に、本学を取り巻く極めて厳しい状況を考えますと、与えられた責務の大きさに、いま改めて身の引き締まる思いがいたします。

この大役を果たすべく、地域に根ざした医療・福祉の向上という本学の建学理念にもう一度立ち返り、学びがいのある大学づくりに全力で取り組む所存です。

学長に就任して3か月。現在、本学の教育方針を見定める「海図」、すなわちグランドデザインの策定作業を急いでおりますが、既に幾つかの改革に着手しました。

一つは、教育及び学生を担当する学長補佐の選任です。学生と大学のパイプ役として重要な役割を果たす事を期待し、一般教育、基礎医学、臨床医学及び看護学科にそれぞれ配置しました。

二つ目は、体育館の修繕および施設整備です。まず今年度中に床の改修を行い、引き続き来年度には天井改修を行います。また、体育館内のトレーニングルームについては、年度内にトレーニング機具の更新を行う事を決定しました。

三つ目は図書館の施設整備です。要望の多かったパソコンの増設を進めると共に、地域医療に関するコーナーを新たに設置することを決め、現在準備を進めています。

四つ目は、各講座の研究室がある総合研究棟、いわゆる基礎臨床研究棟の改修工事についてです。文部科学省に対し、4年間・約20億円の概算予算を求めて折衝を続けてきましたが、この度、文部科学省から財務省へ要求して頂けることになりました。12月末までには具体的な概要が決まります。その後、順次、学生さんの講義実習棟等を整備していく予定です。

このほか、本学出身の准教授や講師、助教を動員し、複数の学年担任教員を配置するほか、学生サロンを設置し、学長と学生の交流にも積極的に取り組んでいきたいと考えております。

続いて、学生の実習の場でもあります病院について述べたいと思います。

私がまず取り組んだのは、学長選での公約にも掲げたPETの設置です。今やPETは、診療のみならず学生の教育にも必要不可欠な機器の一つです。遅き

に失した感もありますが、現在、早急の設置に向けた準備を急いでおります。

また、看護師、放射線技師、検査技師、薬剤師など、いわゆるコメディカルと呼ばれるスタッフの研修経費についても、大幅な改革に着手しました。従来はその殆どがスタッフの自己負担でしたが、今年度からは、必要経費の全額を大学が負担することにしました。職員の意欲に投資し、職場のモチベーションを高めたいと思っております。

加えて、入院患者の家族が使用するファミリーハウスについても、遠方から来る家族のニーズを考慮し、さらに4室増設します。9月から工事を始め、11月には利用できる予定です。ハウス玄関前の通路も整備しました。

今後、医療体制充実のために実現させたいと強く願っているのが、7:1の看護体制（7人の患者さんに対し1人の看護師）です。各地の病院で看護師不足が問題になっておりますが、旭川医科大学病院は看護師の研修体制が充実しており、看護師の研修費用も大学が全額負担するなど、バックアップ体制は整っています。

先日も看護学科4年生の皆さんを前に、旭川医科大学病院に看護師として就職することの素晴らしさとメリットを、私自身が直接説明しました。地域からいっそう信頼される病院を目指すためにも、看護師たちの職場環境を、更に充実・整備していきたいと思っております。

以上述べてきた諸政策を実行可能なものとしていくためには、財政基盤の強化が不可欠です。国からの補助金に頼っているだけでは、もはや健全な運営はできません。大学経営を左右する病院の診療収入を、今後どのように確保していくのかが問われています。先日、専門のコンサルタントを「学長特別補佐」として迎え、早速に検討に入りました。また、各診療科、各中央部門から将来の目指すべき姿、ビジョンをヒアリングし、その結果をもとに、病院のあるべき姿、「グランドデザイン」の策定を急いでおります。

この「グランドデザイン」のもとに、長期的な視点に立った病院運営を行い、働く職員にとっても、地域にとっても誇りが持てる病院を目指して参ります。

学長としての私のキーワードは、「スピード」そして「先取り」です。「躍動する旭川医科大学」を目指し、学長・執行部、教職員、学生が三位一体となり、全力で大学改革に取り組んでいきたいと思っておりますので、皆様方のいっそうのご支援、ご協力を、心よりお願い申し上げます。



大学改革担当副学長として 何をどう改革すべきか？

副学長（大学改革担当） 笹 嶋 唯 博

大学も病院も国民意識の変革や国の財政破綻と相俟って好むと好まざるとにかかわらず、効率化を目指した改革が求められています。日本の医学部はドイツに倣っており、旧7帝大にて築かれた教授を中心とする医局制度が、昭和40年代に新設された医科大学にもそのまま受け継がれ、現在に至っています。改革の到来は遅すぎたほどですが、医局制度が今や医師養成施設として時代遅れであることは、数十年前の映画“白い巨塔”の最近のリメイクがいかにも現実味がないことからもうなずけます。国民は旧帝大時代の“大学で診てもらえるならしかたがない”という満足とあきらめの姿勢の誤りに気づき、今や世界最高水準の医療が成されなければそれをできない医師・医療施設には訴訟も辞さないという恐ろしい国民に変貌しています。老人の急増で、膨大な医療費が必要な時期にもかかわらず、国は世界に類のない膨大な借財を抱え、医療費を欧米先進国の1/2～1/3というわずかな枠内に納めようとしています。この困難な医療事情の中で、幾つかの大学では、臨床の教授が診療科長を解任されると言う前代未聞の事態が発生しています。理由は診療実績が低迷している、手術紹介症例がない、もとめられる手術ができない、医療事故に関連するものなどです。診療科長を解任された臨床の教授に生きるすべはありませんので、訴訟を起こした例もありましたが、結局、3名はすでに大学を退職しています。教授は講座の象徴でもなければ、総回診が仕事でもありません。その施設の最も優れた臨床医のひとりとして実質的な診療能力が問われており、これは昔も変わらないはずですが、今になって多発しているのはまさに現状を象徴しています。解任されたのはいずれも外科系の教授で、個人的には同情を禁じ得ませんが、内科系とて診療科長としての条件は満して当然です。科を問わず、診療科長は自分の専門を明示し、評価を受けるべきで、これは後述のナンバー講座再編と直結します。

今後、日本の医療では少人数でいかに同等以上の成果を上げるかが争点になるものと思われます。米国の臨床医が超多忙でも医師の増員を望まないのは自分の報酬減につながるからです。そのため徹底した本業への特化が全病院的に進められ、外科医ならば手術以外のことは雑用とみなされます。不可避の雑用は、それに割かれる時間を極力短縮する工夫が成されています。欧米に比べると日本はいかに非効率な診療体制をしいているかが分かりますが、欧米に倣って、医師や看護師、パラメディカル間での仕事の移譲は、各々雑用を洗い出す作業をしていけませんので意外に簡単ではありません。労働安全衛生の分野では“Five S”、即ち整理、整頓、清掃、清潔、しつけ（しつけとは前4項目を厳守する習慣）という5項目の原則があり、今や国際的に承認されている金言だそうですが、これは様々な分野で活用できそうです。我々の仕事も、書類が乱雑に積まれた机と同じです。何が雑用なのか、まず自身の仕事を整理、整頓し、その上で検出された雑用は清掃、即ち他へ移譲されるべきです。

最後に臨床講座の再編の方向について私見を述べます。やがては理想的な形態に変貌を遂げるべきでしょうが、まずは内科、外科のナンバー講座は解体して、大教室とし、内部は細分化して診療科を設置あるいは新設し、各科は診療科長とそれに属する少数（必要以上の人員は俸給減となるべき）の専門医で構成され、科長には責任と裁量権を与える仕組みが妥当でしょう。再編に当たって何よりも重要な作業は、教授から助教まで常勤医師の機能評価であり、現行の自己点検評価法に代わる有効な客観的評価方法の開発・導入が必須です。

改革では相互に関連する多くの課題が山積していますが、改革は数年かかって漸く現実味を帯びてくるのが世の常です。改革の恩恵を受ける世代に積極的な意見や作業への参加が求められるところです。



副学長（病院長） 就任のご挨拶

副学長（病院長） 松野 丈夫

1997年2月に旭川医科大学整形外科学講座の教授として赴任以来、10年が経ちました。今回吉田晃敏学長のご指名により本年7月1日付けで旭川医大病院の第8代病院長に就任いたしました。病院長の拝命は突然のことでありましたが、非常に光榮に存じますとともに、その責任の重さに身が引き締まる思いです。病院長としての方針、抱負などはすでに「旭川医大病院ニュース」第101号に書きましたので、今回は私が北大医学部卒業以来本学に赴任するまでの経過とその間の米国留学時代に影響を受けたことなどについて書いてみたいと思います。

私は1971年に北大医学部を卒業後、北大の第2病理学教室にお世話になりました。教室の事情から卒業後2年目で北大附属病院の検査部助手になり、その後3年間北大病院全体の病理診断等にたずさわりました。この間、所謂コ・メディカルの楽しさのみならず、厳しさ、辛さを十分に味わうことが出来ました。この経験を今回の病院長職に生かして行きたいと思います。その後、当時より興味があった骨腫瘍病理を学ぶために1974年に米国に留学しました。最初の留学地はMassachusetts General Hospital（ボストン）の外科病理部でした。総勢が50名ほどの巨大な組織で、各部門（脳神経病理、消化管病理、骨病理等々）ごとに専門の教授、助教授がいるという日本では考えられないほどの充実で、ここでは骨病理診断におけるX線診断の重要性を学びました。当時の日本の病理医がX線診断などすることは全くなかっただけに、このことはある意味カルチャーショックでした。MGHに続いてMayo Clinicの外科病理部に移りました。ここの外科病理部は手術場のど真ん中にあり、すべての診断をfrozen sectionで行っているのが特徴でした。ここで出会ったDahlin教授とUnni教授の2人の骨病理学者からは「病理診断には知識よりも経験が重要で、十分な経験の積み重ねさえあれば病理診断や画像診断は瞬時に付けることが出来る」という哲学を学びました。お二人から

は「20秒でつけることの出来ない診断は一生顕微鏡を覗いていてもつけることは出来ない」、「時間をかけてひねり出した診断は、真の診断ではない」、「そんなに顕微鏡を覗いていると腫瘍が転移してしまうぞ」などと言われたものです。Mayo Clinicで半年を過ごした後、1年間をボルチモアにあるSinai Hospitalの外科病理部で過ごし、その後は再びMGHにもどり1年間軟骨性腫瘍におけるコラーゲンのタイプ分類を行いました。当時はまだコラーゲンのタイプがタイプ。、「」の3つしかなかった時代で、悪性の軟骨性腫瘍には新しいタイプのコラーゲンが存在することを確認し、この実験が結果的に私の学位論文となりました。1977年に帰国後は病理から臨床（整形外科）の道に方向転換をしましたが、病理医としての7年間は私の原点であると考えています。その後の整形外科医としての基礎・臨床研究の主なものは、1) W.H.O.における骨腫瘍病理組織分類への参画、2) 各種骨盤骨切り術の適応と術式の研究、3) 我が国の股関節形態に合った新しい人工股関節の作成などです。人工股関節に関してはTHA 4-Uと命名してすでに500例以上の臨床経験を積み重ねております。

今後病院長としての最も大事な使命は吉田学長が掲げている17項目の病院に関するマニフェストを念頭におきながら病院としてのグランドデザインおよびアクションプランを作成し、これを出来るだけ早期に確実に実現していくことだと思っています。大石静氏（脚本家・作家）が次のようなことを言っています。「鍋は底をまずきれいにしないといけない。いくら側面がピカピカでも、底に小さな焦げ目ひとつあったら、煮炊きする時、火加減が均等に伝わらない。鍋は底が一番大事である」。今後は病院長として、病院を底からささえていただいている全職員の皆様のご意見、お気持ちを十分に考えた運営をして行きたいと思っています。皆様のご協力をお願いいたします。



研究担当副学長に就任して

副学長（研究担当） 飯塚 一

このたび7月1日づけで研究担当副学長に就任いたしました。吉田学長のもとでの新しい執行部は、4副学長、5学長補佐、3副病院長と、随分、スタッフは増えている印象です。現在の大学のおかれている状況は、それだけ厳しいものがあるということでしょう。

就任して直ちにわかったのは、今までの教育、研究担当の副学長がいかに大変であったかということ、教育を切り離れた研究部門だけでもこれだけ忙しいのですから、どうやって塩野先生は時間を作っていたのかと驚くと同時に、代々の副学長の先生の御努力に頭の下がる思いです。さらに過去4年間、独立法人化という激動の波をくぐりぬけ、立派なレールを敷いてくださった八竹前学長、石川、塩野両副学長、小川図書館長の前執行部には、感謝の言葉もありません。

医科大学の使命として、教育、研究、診療の3つの柱がありますが、大学としての存在理由の1つは明らかに研究にあるでしょう。研究に従事している人間にとって、これほど時間の読めない作業はないわけで、それ以外の余計なことはなるべくしたくないというのが本音でしょう。その意味でも、極力、無駄は排したほうがいいでしょうし、研究者の貴重な時間をなるべく拘束しないように、会議は必要最小限に、かつ長くても1時間以内に終わらせるよう

にしようと思っています。誰にとっても満足のいく解決策は難しいかもしれませんが、少しでも皆さんがやりやすい環境を作るべく努力していく所存です。

現在は、社会からの評価の時代です。どのように優れた研究であっても印刷、公表までいかなくは評価の対象になりえません。研究者の方には、実験、観察を行い、論文を書き、しかるべき雑誌に受理させて、ようやくひとつの仕事が完成という感覚を忘れないで精進してもらいたいものです。大学の自己評価、外部からの点検評価は、それから先の問題になります。

ここ数年、制度が変わるたびに、大学に残る研修医の減少が問題になっています。本学もずいぶん被害をこうむったわけですが、まず研修医が増えないことには、大学としての基礎体力の低下につながり、研究、診療も含め、組織としての弱体化が危惧されます。幸い今年のマッチングではようやく本学への残留希望者が増えてきています。創立以来30有余年を経て、決して新設とはいえなくなった旭川医科大学ですが、厳しい社会情勢の中で、守るに足る大学であるべく、みんなで力をあわせて頑張っていきたいものです。



副学長（入試・評価担当）に就任して

副学長（入試・評価担当） 山内 一也

この度、7月1日付で入試・評価担当の副学長に就任しました。

本学は本学の教育理念

- 1 豊かな人間性と幅広い学問的視野を有し、生命の尊厳と高い倫理観を持ち、高度な知識・技術を身に付けた医療人及び研究者を育成する。
 - 2 地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医療者を育てる。
 - 3 教育、研究、医療活動を通じて国際社会の発展に寄与する医師及び看護職者の養成に努める。
- を達成するために6つの教育目標を掲げている。

- 1 幅広い教養とモラルを養うことにより、豊かな人間性を形成する。
- 2 生命の尊厳と医の倫理をわきまえる能力を養い、病める人を思い遣る心を育てる。
- 3 全人的な医療人能力や高度な専門知識を得るとともに、生涯に亘る学習・研究能力を身につける。
- 4 幅広いコミュニケーション能力を持ち、安全管理・チーム医療を実践する資質を身につける。
- 5 地域・僻地住民の医療や福祉を理解し、それらに十分貢献しうる意欲と能力を獲得する。
- 6 積極的な国際交流や国際貢献のための幅広い視野と能力を習得する。

この教育理念・教育目標実現のためアドミッション・ポリシー（入学者受入方針）

「医師・看護職者としての適正とともに地域社会へ

の関心を持ち、自らが問題を見つけ解決する意欲と行動力を持つ学生」と定め入学試験を行っている。

現在入学試験は前期・後期の一般入試以外にAO入試、編入学入試を行っているが、これに加えて、来年度から募集人員10名の地域枠推薦入試を行うこととなった。

「生まれ育った地域が、北海道の上川中部を除く道北、道東並びに北空知及び中空知に該当し、将来、当該地域における医療に貢献する強い意思がある者」

これが出願要件の第1である。道北、道東地域の医師不足解消に繋がることを期待している。さらにこの枠を拡大し北海道全体の地域医療に大きく貢献する旭川医大となるよう平成21年度以降の入学試験のあり方について入試委員会、入学センター等で検討を加えていきたい。

評価については、年度評価、自己点検・評価、教員評価、貢献度評価等々現在多くの評価が行われている。教員評価については18年度初めて全教員に対して行われたが、多くの教員から貴重な意見も寄せられているのでこれらを参考にして評価内容を改善していきたい。今年度から来年度にかけて中期目標の期間評価が行われるので関係各所のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。



新図書館長としての抱負

図書館長 藤尾 均

7月1日付で本学第16代の図書館長に就任しました。一般教育スタッフとしては星野（物理学）・笹森（社会学）・内田（化学）・岩渕（心理学）・山内（数学）各教授に次ぐ4年ぶり6人目の館長です。若輩ではありますが、吉田学長の公約のひとつである図書館改革を果たすべく努力していく所存です。図書館委員会内に設けたワーキンググループでは、10月初旬に改革グランドデザインの策定に取り掛かります。

図書館改革の柱は、蔵書や検索用パソコンを充実させて学生・教職員の利便性を向上させるだけでなく、外部の医療者や一般市民にも広く利用を働きかけることにあります。運営費の大半を国民の税金によって賄っている以上、利用者拡大の推進は当然のことです。既に小川前館長の時代に365日24時間オープンと一般市民への図書貸出が軌道に乗り、好評を博しています。内外の利用者の拡大には今後とも尽力していく所存です。

私は就任早々、学長の御高配を得て新機軸をひとつ打ち出しました。医学古文書展示コーナーの設置です。8月3日のオープンキャンパスに合わせ、『解体新書』など江戸時代の貴重な解剖書10点を鮫島夏樹名誉教授（第一外科初代教授・元副学長）より拝借して高校生やその保護者など400余名に公開し、その余勢を駆って更に3日間、一般市民にも公開しました。新聞報道も手伝って旭川市内だけでなく札幌・滝川・帯広・名寄などからも参観者があり、3日間で60余名に達しました。この試行が好評だったため、先般の図書館委員会で医学古文書展示を正式に図書館の事業として認めていただきました。今後は折に触れ、本学の貴重書はもちろん、本学関係者が所蔵する古文書も、各位の御協力を仰いだうえで積極的に公開していく所存です。

9月初旬には学長の御指示で図書館入口に大きな地球儀を吊しました。本学にゆかりの深い国々にはシールを貼ってあります。学生が毎日これを眺めることで海外に雄飛するモチベーションが高まればと願っています。むろん、学生にはグローバルな視点だけでなくローカルな視点も大切です。教育理念にもある通り、本学は「地域に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医療者を育てる」ことに努めています。カリキュラム改革と連動させて地域・僻地医療に関する蔵書を飛躍的に充実させることも、本学図書館の喫緊の課題だと考えます。

むろん、新企画を追求するだけでなく従来の職務も怠りなく進めていく所存です。重要なのは、購入書籍の中でとりわけ大きな比重を占める外国雑誌の取捨選択です。年々、国からの交付金が削減され、一方では外国雑誌の価格が高騰していく中で、その取捨選択の判断には一層の公正さと慎重さが求められています。図書館委員会の、透明性を確保したきめ細かい運営を心掛けていきたいと考えます。

情報の伝達・保存の手段が印刷紙にはほぼ限られていた明治・大正時代の大学では、図書を管理する図書館長は文字通り情報の取捨選択に絶大な権限を持っていました。現代では情報伝達・保存は電子媒体が中心ですから、図書館長の権威も大幅に低下しました。しかし、形のうえでは、多くの大学で図書館長は、いまだに情報管理の最高責任者になっており、本学も例外ではありません。その重責を肝に銘じ、当該委員会やそれらを主管する部・課・係の御協力のもとに、今後とも情報管理を恙なく遂行していく所存です。

とりわけ情報の発信に関しては次の点に尽力します。（1）学術成果リポジトリ委員会では各講座・学科目の御協力を仰いでコンテンツの飛躍的な充実をめざします。（2）研究フォーラム編集委員会では、この学術誌をより多くの方々に注目されるものに刷新します。ちなみに本誌に関しては刊行の継続そのものを疑問視する声も聞かれますが、学長経験者から気鋭の院生までが一堂に会する貴重な広場（フォーラム）であるとともに外部評価の安定・向上に不可欠な学術交流メディアでもあることを御理解ください。（3）広報企画委員会では本学ホームページの中身を見直し、とくに海外への情報発信のために英語版を充実させます。（4）情報公開委員会では、マスコミや一般市民からの情報開示請求に対し適切かつ迅速な対応を心掛けます。開示・非開示の判断は中央省庁および本学のマニュアルに従って粛々と進めています。今後は対応に苦慮する請求の増加も予想されますが、機敏に対処していく所存です。

逆に、情報のセキュリティに関しては、情報セキュリティ委員会と個人情報管理委員会が、情報処理センターのスタッフ各位の御支援のもと、万全を期していきます。

各位の一層の御支援・御協力を心からお願いして、就任の御挨拶といたします。

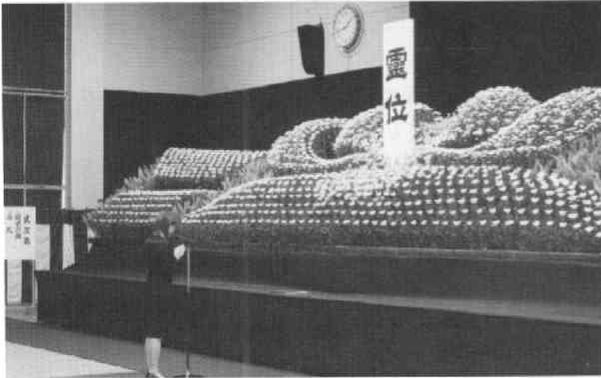
平成19年度解剖体慰霊式

平成19年度解剖体慰霊式が9月19（水）午後1時30分より本学体育館において執り行われました。

慰霊式においては、本学学生等の教育及び学術研究用に尊い遺体を提供され、医学発展の礎石となられた方々の精霊の御霊に対して、ご冥福をお祈りするために

黙とうが捧げられ、引き続き吉田学長と学生代表（医学科第3学年真能芙美香）から追悼の辞が述べられました。

その後、御遺族と御来賓の方々並びに教職員、学生の代表からの献花が捧げられ、亡くなられた方々の御遺徳を偲びご冥福を祈念しました。



体育大会が開催されました

去る8月29日（水）に学生会が主体となり体育大会が開催されました。種目はバレーボール、バスケットボール、ソフトボール、サッカーの4種目で各学年、クラスごとにチームを結成し試験期間を前にした夏休み明けの1日を体づくりの一環として存分に楽しんでいました。体育館で行われた、バレーボール、バスケットボールは、

残暑厳しい中、汗だくになりながらも日頃のクラスの団結を競い熱戦が繰り広げられました。また、屋外において行われたソフトボール、サッカーは快晴の中、普段運動をしていない学生も競技に戸惑いながらも若さをぶつけて弾けている姿が印象に残りました。



外国人留学生夏季オリエンテーション

平成19年度外国人留学生交流事業の一環として、夏季オリエンテーション及び交流会が8月10日（金）、本学に在籍する外国人留学生、研究者及びその家族の8名と、本学職員3名が参加して行われました。

これは、外国人留学生のみなさんを旭川市内の文化施設等に案内し、日本文化と旭川市についての理解を深めていただくとともに、職員等との親睦を図り、留学生の学習、研究活動及び日常生活の充実を図ることを目的としているものです。

今回は道立旭川美術館と旭山動物園を見学しました。

午前中の道立旭川美術館では、いま美術の世界で注目を集めている彫刻家 三沢厚彦氏の「ANIMALS+」を鑑賞しました。誰もが知る野生動物や人間に身近

なペットなどを題材にした木彫りの作品は表情や姿をデフォルメしながらあらわされていて、親しみやすいものになっていました。これに加えて、粘土の作品や絵本原画のドローイングなどがあり、彫刻の楽しさや魅力をより感じたものになりました。

昼食をはさみ、雨の上がった午後は「行動展示」で全国的に有名になった旭山動物園で本物の動物を自由に観ていただきました。ここでは動物それぞれの生き生きとした動く姿を通して、野生動物の特徴や様々な自然環境の必要性を学ぶことができたようです。

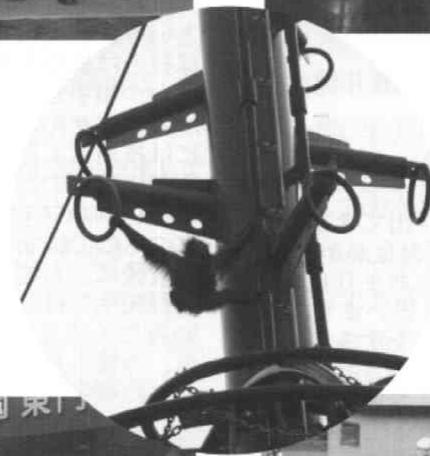
外国人留学生のみなさんには一日を通し、有意義に過ごしていただけたと思います。



▲道立旭川美術館



▲木っキリン？（美術館）



◀揺れてます。オランウータン（動物園）

▼旭山動物園



▼「さて、次はどこへ」（動物園）



クラブ紹介

陸上競技部

陸上競技部 主将 光武 遼

なぜ陸上競技をするのか？

僕なりに考えてみた。きっと満足していないんだと思う。走るとは子供の頃から皆がしている行為である。それを高めていくのが陸上競技である。改善すべき点は無限にある。すべて改善できるとやたら速くなる。言葉では簡単だ。やると難しい。1年たっても習得できないことなんてざらである。大切なことは日々練習を行うことである。先輩にこう言っていた人がいた。「昨日1年ぶりに休んだわ」。これが偉いとか真似しろとかいうつもりは毛頭ない。ただ陸上競技をするというのはこんなものである。そしてここで大事なことは医大生であっても、もし真剣に競技をしたいのであればできるのである。医大生だから全学の連中に負けるというのは、ただの言い訳である。

次になぜがんばれるのか考えた。目標は非常に大切である。それと同じくらい大切なことは悔しいと思うことである。試合でうまくいかないことなんてよくある。他の競技者からだめだねえとか言われると腹が立つ。ムカつくから次の日からさらに練習する。練習で苦しくなっても、そいつを思い出しながらクソッと言いながらなんとかがんばる。そして部活でもそう思えるやつがいる。毎

日悔しい思いをして帰る。毎日だ。だからその度に練習がんばろうとか、どうやったら速くなるだろうと常々考える。そうして年間300日以上を過ごす。結局は目標があるからたとえ一人でもがんばれるのである。でも、本当にかんばれる理由は自分の速い走りができたときがうれしいからだと思う。競技をしていて目立つことが好きなのだ。がんばった分だけ目立てるのである。ご褒美がないとやってられないというのも事実である。

どこまで陸上競技をやるかなんて人それぞれだと思う。でも、結果が残らないとつまらないと僕は思う。努力したからといって必ず結果を残せるものではない。しかし、努力なしに結果は残らない。なので今日も僕はがんばるのである。



ゴルフ部

ゴルフ部 主将 酒井健太郎

みなさん、こんにちは。旭川医科大学ゴルフ部は現在、男子19名、女子17名が在籍しています。

最近では、宮里藍選手やハニカミ王子こと石川遼選手の活躍で華やかなイメージが出てきましたが、大多数の人はゴルフという「お金がかかる」とか「おじさんのスポーツ」というあまり良いとはいえないイメージを持っていると思います。

しかし、私達はゴルフ場でバイトをすることによって、格安の料金でゴルフ場を使用させていただき、道具も部のものが支給されるなどイメージとは間逆とっていい活動形態をとっています。旭医ゴルフ部の練習環境は他大学に誇れるものと自負しています。

また部員のほとんどは大学からゴルフを始めた人であり、初心者でも気兼ねすることなく、個人個人が技術の向上を目指して、練習に取り組んでいます。

もちろん部活動である以上、大会で結果を残すということが大きな目標です。去年の東医体では男子が団体3位、女子が団体5位、そして個人でも男女1名ずつの入賞者を出すことができました。現在はゴルフを楽しみつつ、去年のような成績を出そうという高いモチベーションを持って部

員は練習に取り組んでいます。

ゴルフという競技は止まっているボールを打つという、テニスや野球、サッカーといった多くの球技とは異なる性質を持ったスポーツであり、なおかつ相手がいないため、常に自分と戦わなければいけません。自分の納得するプレーをするためには技術はもちろん必要ですが、その技術を支える強い精神力が何より必要になってきます。そうして、ゴルフで鍛えられた精神力は確実に将来役立つものではないかと思えます。

最後に、お忙しい中顧問をしていただいている紀野先生をはじめとして、部活を支えて下さっているたくさんのOB・OGの先輩方に感謝しながら、今後も旭川医科大学ゴルフ部がより発展するように頑張りたいと思います。



クラブ紹介

合唱部

合唱部 指揮者 江川智美

合唱部は現在、54名で賑やかに活動しています。今年度は14名を新たに迎え、ますます盛り上げてくれています。

主な活動は、7月のサマーコンサート、12月のクリスマスコンサートで、それぞれ医大病院と吉田病院で行っています。この2回を成功させる為、昼休みや放課後を使い、日々練習しています。いずれも病院で行うコンサートであり、お客様は主に患者様です。そのため、選曲する際にはいわゆる合唱曲である組曲などの、耳慣れない曲は最小限にとどめ、出来る限り聴いたことのある映画曲や童謡を取り入れるように心がけています。また例年、1年生や2年生による、曲に合わせたかわいらしいダンスを披露し、ご好評を頂いています。

昨年度から新たな試みとして、札幌よりプロのテノール歌手をお招きして指導して頂いています。1回のコンサートにつき1～2回程度ですが、ストレッチから発声まで、きっちりと見ていただきます。今までこのような経験はあまりなかった為、大変良い刺激となっています。

歌とは、“体”という“楽器”を用いて演奏する音楽です。腹筋を使って呼吸をし、鼻の奥やその他の頭の中の空洞で音を共鳴させます。他の楽器と同様、

歌も練習すればするほど綺麗な響きを出す事が出来るようになります。しかし、合唱はこれだけでは足りず、ソプラノ、アルト、テナー、ベースという4パートの息をピッタリと合わせ、綺麗なハーモニーを作る事がゴールなのです。その為には自分の声ばかりを主張せずに相手の音を聴き、自分の音を寄り添わせないとはいけません。これが出来てピッタリとあったときは、本当に快感で鳥肌が立ちます。合唱で一番難しいポイントであり、醍醐味でもあります。

最後になりましたが、合唱部を支えてくださっている顧問の小川先生をはじめ、病院職員の方々、観客の皆様がこの場を借りてお礼申し上げます。今後も、観客の皆様により綺麗な歌声を届けられるよう、部員一同努力してまいります。



ギター部

ギター部 部長 真能美美香

こんにちは、ギター部です。みなさん、ギターにはいろいろな種類があること、ご存知ですか？一般的に「ギター」というとアコースティックギターを思い浮かべる方が多いかと思いますが、他にもクラシックギター、エレキギターなどがあり、それぞれに特徴的な音色を持っています。ギター部室にはこの3種類のギターに加え、エレキベース、電子ピアノが常備されており、昼休みや放課後には音楽好きが集まって曲を演奏したり、話をしたりして過ごしています。

ギター部は、年間4回程、医大病院でコンサートを行っています。6月に「精神科ディルムコンサート」、7月に「サマーコンサート」、8月には「音楽のタベ」、1月に「ニューイヤーコンサート」で、部員はこの発表の場を目指して練習しています。コンサートの選曲は基本的に自由で、使用機材も自由とし、それぞれが気に入って、患者さんにも楽しんでいただけるだろうと考えた曲を出し合っています。ギターのみで演奏する人、弾き語りをする人など、演奏形式は様々です。

今年は秋の一つ、コンサートを増やす予定です。ギター部ではコンサートの度に、患者さんにアンケートをとっています。その中で、「もっと分かる曲をや

ってほしい。」「昭和の曲が聴きたい。」などの意見を多数いただきました。部員で話し合ったところ、「患者さんに喜んでもらえる曲でコンサートを創ってみよう。」という意見にまとめ、10月末～11月上旬頃のコンサートの少ない時期に、「昭和のヒット曲や音楽の教科書に載っている曲」というテーマでコンサートを行うことにしました。患者さんと一緒に歌い、一緒に音楽を楽しめるコンサートになればいいな、と日々企画を練っています。

音楽を通じて患者さんと心の触れ合いをしたい、自分達の演奏で患者さんに楽しんでもらいたい、というのが私達の活動のコンセプトです。コンサートに来てくださった患者さんの笑顔を励みに、これからもたくさんのお声を届けていきたいです。



管理室より（課外活動用具貸出の御案内）

暑い夏が過ぎ去り短い秋の日を過す今日この頃となりました。ご存知のとおり課外活動用具管理室では、スポーツの秋に向けてはもちろんのこと、これから訪れる長い冬に向かってウインタースポーツの用具の貸出の予約も受け付けております。用意している用具のサイズ、数量に限りがありますので事前に予約いただいたほうが、ご希望に副うことができると思います。毎週、月水金の昼12時30分～13時00分に福利厚生施設棟1階理髪室隣りの管理室にて貸出しを行っていますので、今年の冬にウインタースポーツを体験したいと希望される方は顔を出してみてください。

利用できる用具は、ゲレンデスキー・一式、

歩くスキー・一式、スノーボード・一式です。サイズが合えばスキーウェア（洗濯後返却）やグローブも貸出しています。

なお、残念なことです毎年借りたままで春になっても返却を忘れていた学生が数人おります。ひどい場合は卒業するまで返却を忘れていた学生がございました。大学としては「できるだけ多くの学生に冬の北海道を楽しむ機会を作ってもらいたい」という思いで貸出用具を用意していることから、ルールを無視する学生にはそれなりのペナルティを考えたいと思っています。くれぐれも約束を守るという当たり前のことを忘れずに借りに来て下さい。



奈 外

皮膚科学講座
准教授 山本 明 美

プロジェクトX

－ 合言葉は「二輪草」－

7月25日夕刻、広報担当のK課長補佐と私は旭川市の記者クラブで緊張していた。新聞記者は「いったい何人の女性医師、看護師を復職させる見込みがあるのか、数値目標を具体的に言ってください」とせまってきた。私一人だったら無理やり数字を言わされていたにちがいない。Kさんの冷静な答弁に記者たちも納得し帰っていった。しかし、気がついてみたら、一番話したかった「二輪草」について誰も聞いてくれなかった。というわけで、この場を借りて少し書かせていただく。

今年の1月から石川前病院長のもと、学内でプロジェクトチームを組んで、文科省が推し進める「地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」に応募する企画を練った。育児などのために一旦現場から退職した医師、看護師を復職、定着させる事業をする、と病院長が宣言したのだ。

職員へのアンケートでも育児をしながら働くうえで最も心配なのは子どもが病気になったときであると確認された。ここで普通は病児保育という発想がでる。しかし、メンバーの間宮敬子先生は「子どもが病気のときくらいそばにいてあげたいものよ」と言われた。眼からうろこ、という感じである。こうして考えたのが病児を一時あずかり、その間に仕事を引き継いで、後は子どもと帰宅する、というシステムである。

さらに東京に説明会を聞きにいったくださったメンバーが重要な情報をもたらした。審査員は全員女性だという。（おそらく中高年であろう）女性審査員に高得点をつけてもらえるような企画にしなければ。この年代の女性の好きなものは花だ。プロジェクトにふさわしい花をシンボルに選んでアピールしよう。復職支援研修は5段階からなるので、5弁花。旭川で自生する花。花言葉が適切。こういったキーワードでネット検索し二輪草に行き着いた。（時代の変化に対応できる）しなやかな茎から、2本の花（医師、看護師）が伸びて可憐な白い花を咲かせる。花言葉は友情、協力。こうして企画を二輪草プランと命名し、その他、メンバーの沢山のアイディアを載せて申請したところ、採択された。二輪草プランの会議は終始楽しく実りもあって本当に良かった。これで本院がより働きやすくなれば幸いである。